

芋粥
露青

朝靄でしつとりと濡れた窓の奥を薄汚れた人々が目まぐるしく往来している。私は使い古した背囊を抱きかかえてうつらうつらと舟を漕いでいたが、誰かがコツコツと窓硝子を叩く音でぬくぬくとした眠りの床からふっと身を起こした。

「御免下さい」

古ぼけた三等車の車窓を押し上げると鉄道公安官の男が申し訳なきように突っ立っている。彼は帽子を取って会釈すると、

「すみませんね、おやすみ中のところを」

「いえいえ、お気になさらず……何かあったのですか？」

「いや、なに大したことじゃないんですが——実は焦茶色のハンチング帽を被った身の丈五尺三寸ぐらいの少年がそちらの席のほうに紛れ込んでないかと思ひまして……」

はて、と思い私は首を人気のない三等席のほうにねじ向けた。今座っている席にもその向かい側にも子供の姿は見えないし、車内にも大荷物を抱えた大人が数名いるばかりだ。

「いえ、いない様子ですが……」

「そうですか……いやね、よくある話ですよ。この間の戦争で父親も母親も亡くしちゃった浮浪児の坊ちゃんが生生活費欲しさに金持ちの老婆をヒ首で一突きブスリと……現場近くのタバコ屋の爺さんから奴さんは国鉄の駅舎

に逃げ込んだって目撃談が寄せられたもので、こうして一席一席確認してまわってるんですよ」

少し剃り残しのあるざらざらした顎をさすりながら私はその悲劇的な運命に囚われた少年の姿を思い浮かべてみた。ぼろきれのような服に砂埃にくすんだ小さな革靴。目深にかぶったハンチングから覗く二つの眼は野犬のようによく凶暴な飢えの光をたたえている。(その想像の姿は復員してきた夜に上野駅で見たあの浮浪児の少年たちによく似ていた。)ガンガンと鳴る頭をもたげながら血糊のべったりとこびりついた刃物と奪った札束を抱えてその少年はいったいどこへ姿を消してしまったのだろうか。

「ま、ここには来てないようなので大丈夫でしょう。どうも失礼しました。他を当たってみます。」

男は、ぼんやりと物思いに沈む私に見切りをつけて再び帽子をヒラヒラと振ると、他の車窓を叩きにうすく湿った石畳の上を駆けていく。私は、絶望の淵で弱弱しくうずくまっている少年の末路に思いをめぐらせながら背囊から取り出した握り飯にかじりついた。

何故日本が米国に勝てるなどという馬鹿げた発想に至ったのかはわからぬが、この戦争で私は多くのものをいっぺんに喪った。戦場に駆り出されて生き残るために知りもしない外国兵を機械的に撃ち、刺し、絞め殺していく血塗れた日々の中で私の人間としての清純な精神は根こそぎ穢れに浸食されていった。私はかろうじて奇蹟的

にビルマの戦地から帰ってくる事ができたが、ニューギニアの戦地へ赴いた友人たちは皆絶え間のない地獄の中でモルモットのように惨たらしく野垂れ死んでいった。軍国主義の無謀な奇行がもたらした被害は戦場だけでなく本土をも赤く染め上げた。殺戮に疲弊しきつてささくれた肉体を引きずって妻子の待つ町へ帰ってみると、その愛しい命は懐かしい日々とともに家屋ごと吹き飛ばされていた。何一つ馴染みのものが影を落とさぬ虚ろな焦土に跪いてもその空間は砂利がこすれる音しか与えてくれない。

人間はいきなり何もない虚無へと放り出されると今まで頑張つてつなぎとめてきた神経の何本かがプツリプツリと音を立てて切れていくのを知覚する。私は涙さえ流すことなくその忌まわしい場所から逃げるように立ち去ると、幸いにして燃えずに残っていた昔の職場のロッカーから元の暮らしの残骸をかき集め、午後八時発のどこへ行くとも知らぬ汽車の三等車輦に飛び乗った。今や行先などどうでもよい。もう、故郷には帰らないつもりだった。妻は「薄情者」とせせら嗤うかもしれない。幼い娘は目にいっぱい涙をためて私の名前を呼び続けるかもしれない。が、私は振り返ることなくこの逃避行に甘んじることにした。自分という存在が土台から崩れ去ってしまうことを恐れるがゆえに。

発車のベルが鳴った。昨夜から孤独な私を乗せて馬車

馬のごとく働いている車輪の、けだるく腰を上げたガタンという衝撃で思わず尾骶骨が震える。金属と金属とが軋みこすれあう音が木造の車内全体を包み込んだ。発車許可が下りたという事はどうかやら車内には件の「おたずねもの」はいなかったらしい。ホームの端のほうで公安官と駅員の二団が何か思案顔で話し込んでいるのがちらりと見えた。が、それもすぐに後方へと流れていき過去の風景と化する。

ボーッと惚けた表情のまま硬い米を無機質にかじりつづけていると、突然目の前を鮮烈な紅色の塊が横切った。ハッと驚いて前を見ると向かいの席に赤い着物を着た少女がぼつんと腰かけている。私はその、ともすれば簡単に崩れてしまいそうな少女のひ弱な美しさに胸を締め付けられて、そっと、しかし半ば喰い入るように彼女の肉体に視線の刃物を入れた。きめ細やかで上質な絹を思わせる白い肌にどんな光も吸い込んでしまいそうなまっくろな髪、そして赤く紅さしたそのいじらしい引き締まった唇が美しく調和のとれた色合いの三角形を幻出している。純粹な生命の輝きに濡れた黒曜石色の大きな眼はどんなに高価な宝玉よりも見る者の心を悦ばせる。鮮やかな朱色の着物に包まれた少女の貧弱な軀は甘美なる成長の可能性に芽吹いていて、まだ小さく青白い胸のふくらみにはきつと知ってはならない少女の秘密がいっぱいつまっているのだろう。

すると、彼女は観察者である私の視線に気が付いたのかバラ色の微笑みを浮かべて、「おじさま、わたしの顔に何か付いていて？」と首をかしげた。

脳髓に火花が散った。その、上物の琴をかき鳴らしたかのような透き通った声！私は、少女の軀を折れるほど抱きしめたいという逆らいがたい衝動に駆られた。そんな葛藤を少女は知るはずもなく、私の目をのぞきこむようにしてまた口をひらく。

「おじさま、おじさまもひとりなの？」

私は今まで感じたことのない奇妙な心のざわめきを抑えつつ優しい口調で答えてやる。

「そうだよ。おじさんはひとりぼっちで住んでいた町から出てきたんだ。きみもひとりかい？」

「うん。お父さまもお母さまもみんなわたしを残してどこかへ行ってしまったの。叔母さまが何日かしてわたしを見つけて助けてくださったのだけど……今からわたし、叔母さまの言いっけで遠くの町に出てお金を稼ぎに行くのよ。ひとりぼっちで心配だけど……。でも、あつちには叔母さまの知り合いだっていうやさしいおじさまがいらっしゃるみたいだからこわくなんてないわ」

似た境遇にある少女の話聞いて私はなんと見上げた子であろうと嘆息した。見たところ十二、四歳のあどけない少女はけなげにも叔母さんのために思い言いつけを守って行動しているのである。私はどうとうこのいじら

しい少女を温めてやりたいという衝動に耐えることができず、「おいで」とときこちない動作で隣の席を空けてやる。すると少女も私に対し好感をおぼえたのか、なんのためらいもなく私の隣に腰かけるとその小さな躰をもたれかからせてきた。私もそっと彼女に寄りかかる。少女の躰は驚くほどつめたく、まるで綺麗な水晶でも抱えているような心持になった。

「おじさまはどうしてひとりなの？」

硝子細工の声帯から発せられた無垢な質問に、私はハツと身を固くする。

「それはね、おじさんの家族もみんなこの前の戦争で遠いところへ行ってしまったからだよ」

「あら。おじさまもわたしとおんなじなのね！　ひとり残されて、さびしくて、心細くて」

「ああ。でもきみは偉いね。ちゃんと現実から逃げ出さずに世話をしてくれる叔母さんの役に立とうとしてる。おじさんにはできなかったよ。おじさんはすべてを捨ててこの列車に乗ってしまった。自分の足で歩こうともせずに、自分の意志とは関係なしにどんどん遠くへ連れて行ってくれるこの列車にすべてを任せて、逃げて……」

「おじさま、泣いているの？」

「いや、違うんだ。ただ、少し疲れて……」

「おじさま、涙を拭いて。おじさまが泣く必要なんてひとつもないわ。自分のことを責める必要も。すべてはお

天道さまがお決めたことなのだよ。わたしたちはお天道さまに導かれるがままに動くしかないの。だからね、涙を拭いて」

とめどなく流れる雪どけ水のような涙が私のはいていたズボンをぐっしりと濡らす。少女は泣いている私を慰めようと、私の肩に甘えるように抱きついてきた。

「こういうかなしいときはひとりであるからいけないのだよ。ほら、わたしも一緒にいてあげてあげるから。

わたしだってお父さまとお母さまにも二度と会えないんじゃないかと思うと胸が張り裂けてしまいそうになるほどかなしいの。だから二人で、ね。二人で寄り添っていればかなしみもどこかへ逃げていくはずだよ」

私は思わず少女をぎゅっと抱きしめ、その胸の鼓動をしっかりと身に刻み付ける。私の胸にやわらかく伝わった弱いその鼓動は、もつともつとくしゃくしゃにつぶれるほど抱きしめて与えられるだけの温もりをすべて与えてやりたいという思いを駆り立てた。少女も温もりを求めて拒むことなく私の胸に身を任せている。どんぐりのようなかわい眼を閉じると長い睫毛に伝っていったる涙が妙にしおらしい。お父さま、という少女の短くか細いささやきに私もそっと目を閉じた。眠りに入る寸前、まぶたの裏に浮かんだのは私の躰をそっと包み込むようにして抱き穏やかな微笑みを浮かべる我が妻の姿――。

* * * * *
夢を見た。妙な、そしていやにリアルな質感をもった夢であった。

私と少女はある古い薄汚れたアパートの一室で笑い転げながらじゃれあっていた。ところどころヒビが入った大きな硝子窓からは不吉なほど真つ赤な西陽が部屋じゅうを朱色に染め上げんと力いっぱい差し込んでいる。汚く錆びた銅色の玄関扉はときどき荒々しい強めのノックを受けてがたがたと鳴っていたが、どういうわけか私たちはそれに気づかない様子で部屋の隅にあった鉄道の模型ミニチュアを動かしては線路の上を走っていく列車を寄り添って眺め始めた。青い車体の客車は鎧のような汽車にひかれてジイジイと音を立てながら走っている。精巧に作られた家々の間を抜けて、列車はひどく汚れた倉庫地帯に差し掛かっていた。二人の目はずっと青い客車を追い続け、その間も暴力的なノックの激しい音は絶えることなく扉はかすれたような悲鳴をあげてきしんでいる。

と、ふいに線路の上を遮るように落ちていた長い一本の髪の毛が車輪にからまってしまい、列車は二本の細い線路から脱線してしまった。私たちは驚いてお互いの顔を見合わせる。気まずい沈黙。列車が脱線したと同時に扉を叩く粗暴な音も、もうあきらめたのかぶつりと止んでいた。夕陽もいつのまにやら地平にほとんど身を埋

め、紫がかった天鵞絨(びろーど)の闇が部屋を息苦しく占拠し始める。覆いかぶさるような威圧感のある夕闇から少女を守ってやらねばとその瘦せた軀を抱きかかえようとしたが、隣にはもう彼女の姿はなく、まるで闇の海に溶け込んでしまったかのようだ。自らの進むべき道筋を失った列車は車輪をむなしく虚空に回転させながら、低い声でジイジイとうめき続けていた。

* * * * *

ガタン。

車体が大きく振動した。金属と金属のこすれあう音がひどく心地の悪い目覚ましとなって私たちの意識を覚醒させる。少女の喉から「あッ」という短い叫びが漏れた。どうやらここが彼女の目的地のようである。私も別段行きたいところもないので最後まで少女についていくことにする。

腕や鼻の欠けた傷痍軍人の群れがもぞもぞと蠢き不調和な行進を重ねるプラットフォームを抜けて汚く黒ずんだ改札口を出ると、トタン板で作られたバラックや煤けた煉瓦造りの倉庫が立ち並ぶ混沌とした町の風景が白黒色の波となって私の目の前に飛び込んできた。故郷の町とはまた違った不気味さはらんだぞす黒い印象イメージ。しばらくぼーっと呆けた表情をして立ち尽くしている

紅色の少女が無邪気な黄色い叫び声をあげた。

「あッ、あのひとが叔母さまの言っていたかただわ！」
生きる喜びに満ちている春先の小枝のように華奢に伸びた少女の白い腕が指すほうをみると、成程。真白なシヤツに赤色のネクタイ、上には白のジャケットを羽織り、下は同じく白いズボンと見るからに金持ちそうな恰幅の良い男が浮浪者の少年に黒い革靴を磨かせている。見た目から判断するに年齢は五、六十代。灰色のひげを豊かにたくわえ、額から流れ出る汗をしきりに洋式手拭ハンカチーフでぬぐっている。

いかにも好々爺然としたこの男のことを私は何故か良い印象でとらえることができなかった。金属製の黒いステッキを胸に抱え、一生懸命に革靴を磨く少年の頭上に憐れみと慈愛がごちゃ混ぜになったようなやさしい視線を注いでいるところを見ると得も言われぬ温かみのあるものがじんわりと胸中に広がっていくのを感じはするのだが、どうもそのやわらかい微笑みの内になにかどろどろとした粘りけのあるものが流れているようなそんな心持ちがしてあまり釈然としない。

だがやがて、そんな思いの源は何もかもが豊かに見える彼への僻みなのではないかと思いつたり顔面に羞恥の情がサツとすべりこんできた。もやもやとした疑念もあわてて物陰に身を潜める。

おじさんの靴磨きが終わりそうなのを視認すると少女は私のほうへくると向き直ってそのすべすべとしたやわらかい掌で私の泥で煤けたような手を握りしめた。

「ん？」

「おじさま。汽車の中でずうっと一緒にいてくれてありがとう。わたし、ひとりぼっちで汽車に揺られて心がつぶれそうだったのだけれど、おじさまの温かい胸で眠っているうちに、なんだかわたし……お父さまと一緒にいる気がしてうれしくなったの。おじさまのおかげで助かりましたわ」

私もだ、とは喉につつかえて言い出せなかった。ここは年長者らしく無言でうなづくだけにしておく。が、本当はもつと彼女の頭を、そのさらさらとした黒い髪を撫でてやりたかった。抱きしめてほっそりとした白い体軀を丹心から温めてやりたかった。彼女への愛しい思いをいわずらに耳元で小さく囁いてそのかわいらしい顔を赤く染めてやりたかった。言い尽くせない思いはいくらでも湧き上がってくる。だがもう分岐点はすぐそこまで迫っていた。私の顔をさびしげに見つめる少女の輝く頬を二度三度撫でてやると彼女は恥ずかしそうに微笑んだ。多分私はこの無垢な少女の表情を一生記憶の箱にしまい続けることだろう。少女はうるんだ瞳で私にさよならを告げ一度大きくうなずくと、そのまま甘い香りだけを残して新しい生活が待つ広場の向こうへと走っていった

った……。

私は少女の足音が雑踏にかき消されて完全に聞こえなくなるまで長い間うつむいていた。少女の後ろ姿を最後まで見届けてやれなかったのは私の心の甘えである。大人だから、一番大事な存在を喪った後だからもう二度と涙は流すまいという自戒が破られそうで恐ろしくなつて咄嗟に取り繕った苦し紛れの誤魔化しだった。そんな自分が恥ずかしいような、情けないような、そんなまじない表情のままゆつくりと立ち上がつて私は、ズボンについた黄土を払おうとこれまたゆつくりとした動作で足元に手を伸ばす。汗とも涙ともつかぬ快い水滴が地面に黒々としたシミをつくつた。

と、その時、私の頭に黒い霧がかかつて視界が遮られたような妙な感じが湧き起こつた。思わず動作を止める。喉の奥から何か酸っぱい粘液のようなものが昇つてきて口の中を気味悪くべつとりと湿らせた。このような嘔吐に駆られる心情は戦地にて目の前で仲間たちが臓物をぶちまけながらなぎ倒されていくときに感じたものと非常に似通つたものだった。ある一人の人間の清らかな存在が抵抗し難い強大な力によつて剝られ、穢され、ぼろきれのようにされていくのを目の当たりにしているかのような、そんなグロテスクな不快感。私はハッと閃くものを感じ、踵を返すとあの可憐な生娘の姿を緊張した視線で雑踏の中に探した。赤い着物も白いジャケットももう

どこか遠くへ行つてしまつたのか何処にも見当たらない。気味の悪い冷ややかな汗が鼻筋を伝う。もう駆け出さずにはいられなかつた。

私は土埃と虚無感に煤けた人々の間を取り憑かれたように夢中で走り抜けた。眼球はすさまじい速さで動きながらしきりに無味乾燥な景色に彼女の色彩を求めていた。駅前広場には闇市のバラック小屋がぼつぼつと点在している。闇米、闇芋、ラーメン屋。人気のない陰鬱とした隅つこのほうには私営の娼館や見世物小屋なんでものまであつて、淫猥さとおどろおどろしさの集合体のような立て看板が好奇心と警戒心とを同時に湧かしめ、見る者をジレンマの深淵へと引きずりこまんとしている。だが、今の私にはそんなものにかまつている暇も余裕もなかつた。

バラックの前で足踏みしている群衆の波濤をかき分けて、私は煉瓦造りの倉庫が建ち並ぶ閑散とした地区に足を踏み入れた。熟れたほおずきのような西陽が沈黙した表通りを真っ赤な絵の具で浸している。荷物の出入搬はお昼には終了したらしく重い荷物と格闘している屈強な男どもの姿は砂煙のなかに溶け込んでしまつたかのようだ。私は急ぐ気持ちに追いつこうと必死になつて疾走し、白黒赤の美しい後ろ姿を焦がれたように追い求めた。夕方方の熱気が音のないじりじりとした騒音を奏でながら私に迫ってくる。影法師は汗まみれの私をせせら嗤うかの

ように何度も伸び縮みを繰り返していた。

と、眼の前に一匹の黒猫が飛び出してきた。その清らかな黒に一瞬少女の生音を幻視した私はハッと息を呑んで思わず立ちすくむ。こいつは雌猫に違いない。男の心をほしいままにする魔性の女のしなやかさを備えている。雌猫の琥珀色の瞳に異様な光が瞬いた気がして、私は彼女が出てきた倉庫間の狭い裏路地に強い興味と暗澹たる予感をおぼえた。その絹製品倉庫と肉類加工品倉庫の間を見てみなくてはおさまらない昂ぶりを感じた私はそつと忍び寄ると、その暗くじめじめとした路地をおそるおそる覗き見る。

ひつ、と情けなく喉から声が漏れた。足はがたがたと震えだし、動悸は恐ろしいほど加速する。目はめいっぴい開いていながらも、その実私はその光景をほとんど直視することができないでいた。そこに描き出されていたのは、地獄絵図。道端にだらしなく落ちている着物の帯が少女の運命を物語っていた。私はあまりの惨状に強い眩暈をおこして、へなへなど地面にへたりこんでしまった。防衛本能からか、思わず臉を固く閉じる。が、目の前で何が起こっているのかは、もうその音からはつきりとしていた。そう、吐き気をもよおすほど気味の悪い、湿り気のある、それでいて粘着質なあの音！ 鼓膜から這い入つて神経を蝕み、骨を溶かし、肉を裂くような、

あの、あの……。

この忌まわしい結末を私は始めから予測しておくべきだったのだ。両親を亡くした若い娘が引き取り先の「親切な」親戚から言いつけられた稼ぎ仕事とは何たるか。現地で待つ「やさしい」おじさんと一緒にする金になる

仕事とは何たるか——よく考えてみればわかりそうなことだった。白いスーツに身を包んだ男の姿を見たときに感じたある種の予感のようなものは決して思い過こしでも僻みでもなかったのだ。「あの時、おじさまがわたしを引き留めてくれていれば悲劇は避けられたかもしれないのに」己の運命を呪うかのようにすすり泣く少女の声はそうやって私を刺すように責め立て、告発していた。

もう、まともな判断を下す余裕など、どこにも残ってはいなかった。ただ脳裡に浮かぶのは路地を覗いたときに偶然目にしてしまった、生娘の羞恥と苦痛に歪みぐちやぐちやに崩れたあの青白い表情だけだ。ガンガンと大きな銅鑼を鳴らすような音が脳漿をかき混ぜていく。血のように赤い夕陽。停止する思考。頬を伝う汗。沈黙。私の頭のなかで何かが弾けて瞬間に燃え広がった——。

* * * * *

どう相手突き飛ばしたのか、はっきりとした記憶はない。ただ目の焦点が合ったときにはもう白い男は変わり果てた骸と化していた。路傍に落ちている不格好なコンクリートの塊には赤黒い血糊の塊がべったりとこびり

ついている。禿げ上がったその頭は今や頭頂部からぼつくりと割れて、柘榴のような紅玉(るび)色の裂面が艶やかだった。ごちゃごちゃに絡まり身動きの取れなくなった思考回路は無理にうなりながらも回り続け、目の前の出来事を受け入れようと必死になっている。私は表情をこわばらせながら、男の屍体を地面に押さえつけんばかりの力で凝視していた。今にもこの白い亡骸が起き上がってくるのではないかという底なしの恐れから、グロテスクな蛾を標本針で留めておくかのように。

と、その時私の背中にやわらかいものを取りついた。

皮膚にしっかりと伝わる、おじさま、おじさまと甘えるように呻きながらすすり泣く少女の声。頭の中で固い糸の結び目がするするとほどけていくのを感じた。そうだ、彼女は救われたのだ！ 私の勇気ある一撃によって醜悪な悪魔はこのかわいいうるさから穢らわしい手を放したのだ！ 確かに私は突き上げるような激情に身を任せ、この手で人を一人殺めてしまった。だがそれによって、少女にこれ以上の裂傷を与えることなく悪は滅びたのだ。これが正義でなくて何であろう？ 背中の少女をそのままに、私はひとり湧き上がる烈しいよろこびに身を震わせた。すべての神経が暗く閉ざされたなかで私が本能的にとった行動は人間としての正しい判断に満ちていた。そのことは私に大いなる満足感と安堵をもたらした。まだ私には美しく清らかな部分が残っていたのだ。熾烈な

戦場で、そして虚無の焦土で喪ったはずの「私」と今ここで再会することができたのである。

とにかく少女を慰めてやらねばと思い私はゆっくりと後ろを振り返ると、怯えきっている彼女の顔に視線をすべらせた。綺麗な硝子玉の眼は冷めぬ恐怖に潤み細かく震えていて、美しい鼻すじも冷たい陶器のごとく硬くなっている。だが、どうしたことだろう。少女のほだけた肩からは桃色の蒸気が立ちのぼり、引きつったように歪んだその唇は陰獣の唾液に濡れて、椿のように毒々しいあでやかな赤みを帯びて妖しく輝いているではないか。彼女はエロスを纏ってしまった——！

鋭い矛で突き貫かれたような強い衝撃を額におぼえた純白の聖性さえ感じさせるような少女の幼気な魂が人を惑わす毒虫へと変態しようとしている！ 私は喉の奥から這い出してきた悲鳴を慌てて手で押さえて呑み込んだ。芽吹きかけていた歓喜のつぼみは凍てつき、夕陽から滴るどろりとした朱色の液体が私の足元にまとわりついてくる。あの白い悪魔が少女になした悪行はただ単に肉体への干渉だけではとどまらなかったのだ。奴は純白な乙女の精神までも汚染してしまった。にじむ墨汁の一滴。ひび一つない水晶の煌めきは灰色に霞み、何重にもはいった亀裂からは一匹のむらさき色の蝶々が這い出でる。ひらひらと舞うその蝶々をめぐって何人もの男が争い、奪い合っている映像が頭の中で霧のように浮かび上がった

た。

そして、その幻燈のなかに白い背広姿の男と私自身の姿を見つけたとき、私は血を吐くような叫び声を上げた。もしや、私は少女と会った時からその白い体躯に眠る羽化への可能性に垂涎していたのではあるまいか。もしや、私はあのけだものを心の底ではうらやんでいたのではあるまいか。自分の気に入った人形マドレーヌに手をかけられて燃えるような嫉妬に駆られたのではあるまいか。だとしたらこの行為はなんだ。酷い臭いを発する私利私欲の塊たる殺人なのか？ 「勇氣」や「正義」といった言葉が次々にぼろぼろとむなしく剥がれ落ちていく。私は戦場で幾多の敵兵を撃ち殺してきた。だがそれは自分が阿鼻叫喚のビルマから生き残るための、生命が望んだ殺人だった。戦争は本来お互いを憎む理由もない二者を引き裂いて対極へと配置する愚鈍な盤上遊戯チェスゲームなのだ。指導者は戦場の惨事を知ることはないが、兵士ソルダは体中に抉れた傷を負いながら血と涙と泥にまみれ、それでも進軍を命じられて虚ろな叫びを上げながら理由も呑み込めぬまま敵陣に突き撃っていく……。しかし今回はどうだ。私は己のふくれあがった欲望にひれ伏してこの凶行を犯したのではあるまいか。それは戦場で体感した生への欲動とは違つか。違うのなら私は穢れた殺人者ではないのか。欲望に駆

られた——人間は欲望を剥きだしにしてはならないのか。私は、このかわい「清らかな」私は今でもあの白い淫らな獣めとはなんら重なるところのない「善良なる」私でいられているのだろうか。

緋色の陽も翳り、夕闇が重く空に垂れ込め始める。もはや目の前の少女は美しい乙女の姿を保ってはいなかった。瞳は濁り、髪は煤け、あれほど白かった肌は今では青緑色に変色して跡形もなく崩れ落ちそうになっている。それは腐敗であった。放置された屍体がぐずぐずに膿み崩れ、どぶ色の汚らしい汁溜りになってしまうようなおぞましい死の腐敗。

私はすべての憎悪をこめて少女の躰を突き放していた。喉の奥から絞り出た彼女の短い悲鳴。鈍い音。後ろを振り返ることもなく、私はそのまま恐ろしいものから逃げようとしてその場を駆け出した。あれは、鏡だ。私の醜い部分を曝け出す、刃物メスのようなつめた鏡。もう何も見たくはない。もう何も喪いたくはない。清らかなこの身にとりついた呪わしい腫瘍から私は目を背け続けなければならぬ。

はやく、はやく、はやく——焦れば焦るほど足はもつれ、耳元で哄笑のような風のささやきがこだまする。気味悪くじめじめと湿った倉庫地帯の裏路地は迷宮の如くどこまでも続いているように見える。夕闇に煤けた風景

が万華鏡のようになると踊り始めた。